

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：83503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720338

研究課題名(和文) 日本古代・中世期における中部内陸地域の交通・交易体系に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental research on the history of trade and transportation in ancient to medieval period.

研究代表者

海老沼 真治 (EBINUMA, SHINJI)

山梨県立博物館・学芸課・学芸員

研究者番号：20574156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：中部内陸地として共通した環境を有する一方、七道制による所属を異にしている甲斐・信濃2国の交通・交易を中心とした関係について、特に両国に関わる文献史料の収集・分析に重点をおいた。その結果、甲斐国は東山道に属するとの認識が古代をとおして存在していたこと、馬正生産とそれに深く関わる群盗の活動の場として盛んな人馬の往来が想定されること、中世移行期における状況から、古代に成立していた両国間の交通路が、中世まで受け継がれている可能性があることなどを指摘することができた。

研究成果の概要(英文)：The trade and transportation relationship of Kai (Yamanashi) and Shinano (Nagano), which are both inland provinces but belong to different regional system (Shichido-sei), were analyzed based on historical documents. As a result, it was revealed that Kai was recognized as belonging to Tosando throughout the ancient period. It was also assumed that traffic between two regions was busy resulting from horse breeding and thefts deeply related to it. Finally, it was indicated from situation in the ancient-medieval transition that the road connecting two regions built in the ancient period may have been continuously used in the medieval period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史・地方史

キーワード：内陸地域交通 甲斐・信濃 東山道 御坂・神坂

1. 研究開始当初の背景

近年における日本古代・中世の交通史に関わる研究は、文献史学・考古学・歴史地理学を中心に大きく進展している。ただしこれまでの研究では、平野部を対象とした研究に比べて、国土の中でも一定の割合を占める、内陸地域・山間地域という視点に立った検討は十分になされてはこなかった。山梨県立博物館では、平成 17 年度より平成 19 年度まで、共同研究「古代の交易と道」を実施し、上記課題のうち、とくに甲斐国における交通・交易の様相を解明しようとする取り組みを、外部の共同研究者とともに進めてきた(『山梨県立博物館共同調査・研究報告 2 古代の交易と道』、2008 年)。こうした視角による研究の必要性は徐々に認知されており、平成 23 年 6 月には古代交通研究会第 16 回大会においてシンポジウム「山国の古代交通 - 東国の峠・坂・川 - 」が開催され、山間地域における交通・交流、人々のくらしや生業、峠・境界における信仰のあり方などを体系的に把握しようとする試みが行われるようになってきている(鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編『古代山国の交通と社会』、八木書店、2013 年)。このように内陸地域・山間地域における交通史研究を進めていくことは、今後も重視されるべき研究課題のひとつとして位置づけられている。

2. 研究の目的

甲斐・信濃・飛騨等中部地方の内陸地域は、高峻な山岳に囲まれ、他地域に通じる交通路が限定された地域である。関係する史料も少ないことから、交通史に関する十分な検討がなされていなかった地域であるとも言える。しかしながら、当該地域は山岳地域・平野部・河川など多様な自然環境下にあり、その環境に応じたさまざまな交通の存在を想定することができる。

また近年、甲斐国の国号の原義は、東海・東山両道を結節する「交ひ」に求められるとの指摘がなされ、甲斐国をはじめとする中部内陸地域が、日本列島における交通体系のなかで、少なからぬ役割を果たしていたことが明らかにされつつある(平川南「古代「東国」論 歴史と文学の往来」『歴史研究の最前線 5『歴史と文学のあいだ』総研大日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館、2006 年)。

本研究は、こうした多様な自然環境に規定された中部内陸地域における交通・交易の状況とその特徴等について、文献史学・考古学など多角的な分析をとおして、交通・交易を通じて形成された他地域との文化交流のあり方を考察するとともに、日本列島の交通体系における当該地域の位置づけを明らかにするための、基礎的な史料・事例の集積をはかることを目的とするものである。

3. 研究の方法

(1) 交通・交易関係の文献史料収集、デー

タ入力：古代～中世における、対象地域の交通・交易に関わる文献史料について、主に県史等の刊本史料集から収集を行う。具体的には、交通路や交通に関わる施設(駅・関等)が明記されたもの、移動の行程が具体的にわかるもの、市・宿など、道と関連する地名等が明記されたものを対象として、関係史料の抽出と編年化、データ入力を行う。甲斐国関係については、すでにある程度収集を進めており(海老沼「古代・中世甲斐国交通関係文献史料(稿本)」、前掲『山梨県立博物館共同調査・研究報告 2 古代の交易と道』)、他地域についてもこれと同様の方法で作業を行い、関連史料の蓄積とデータ化をはかることとする。

(2) 交通路に関わる絵図の調査：中世～近世の絵図類の中で、とくに交通路の状況がよく描かれているものについて、原本調査・写真撮影を行い、文献史料や現在の地形との比較検討、交通路推定のための基礎資料として蓄積する。

(3) 古道の現地景観調査：中世以前に遡ると推定される古道を対象として、想定される道筋とその周辺地域の現地調査を実施し、交通路の立地状況や周辺の景観、史跡等の文化財や古道に関わる地名の所在等の状況を確認する。このことによって、道筋の推定をするだけにとどまらず、交通路をとりまく当時の地域社会を立体的に把握することを目指す。

(4) 他地域の事例との比較検討：中部内陸地域における交通の状況について、その特徴をより明確に把握するため、他地域の事例との比較検討を行う。主に平野部を対象として、発掘調査によって駅路等の道路遺構・駅家関連遺構の検出がなされている地域や、交通・交易に関する研究が進展している地域の事例を選定し、関係する研究文献の収集、現地調査をおこなう。

4. 研究成果

(1) 文献史料の収集については、既に進めていた甲斐国関係の補遺を行うとともに、信濃・駿河・伊豆関係の史料を、刊本史料集を中心に抽出し、データ入力作業を進めた。この結果、甲斐国関係の補遺として 38 件の史料が見出され、既存の成果とあわせて 262 件の交通関係史料を蓄積することができた(海老沼「古代・中世甲斐国交通関係文献史料(補遺)」後掲)。これによって甲斐国については、関係史料の抽出とデータ入力ほぼ完了できたものと思われる。一方、信濃と駿河・伊豆については、関係史料の抽出はほぼ終わることができたものの、データ入力は一部未完となった。また同じ中部内陸地域として史料収集の対象としていた美濃・飛騨については、史料の抽出が未完となり、データ入力とあわ

せて今後の課題として残された。

(2) 交通路に関わる絵図の調査については、山梨県立博物館所蔵の絵図調査を行った。特に正保または元禄国絵図の写と推定される甲斐国絵図は、近世前期段階における交通路を描く資料として、中世以前の交通路を推定する上でも重要なものであることが見出された。また元禄 15 年(1702)の富士北麓裁許絵図写では、富士北西麓を通る道筋に「逢坂」があり、この付近が八代・都留両郡の郡境になっていることが明記されていた。オオサカ(大坂・逢坂・相坂等)の名称は、古代の主要道・峠道を示している可能性が指摘されており、この付近を通る古道として知られている若彦路との関連が考えられる重要な資料となった。今回は調査対象が甲斐国関係の絵図にとどまり、信濃など周辺地域のものまで調査をすることができなかつた。この点は今後の課題となる。

(3) 古道の現地景観調査については、信濃国内を中心に実施した。神坂峠・阿智駅・坂本駅周辺(長野県阿智村・岐阜県中津川市)、伊那郡内の推定東山道駅路(同伊那市・駒ヶ根市)、古東山道(有賀峠越、同諏訪市・辰野町)、碓氷峠周辺(同軽井沢町・群馬県安中市)などの現地調査を行い、周囲の史跡の位置関係や関係地名の所在などを把握することができた。神坂峠周辺では峠とその麓の交通路や関連遺跡の所在を確認し、伊那郡内の推定駅路では、内陸地域の平野部における直線的な交通路のあり方を把握することができた。古東山道は中世初頭に甲斐源氏の軍勢が通行したと推定される道筋と、関連する地名を確認した。

(4) 他地域の事例との比較検討としては、山陽道布勢駅(小犬丸遺跡・兵庫県)・野磨駅(落地八反坪遺跡・落地飯坂遺跡・兵庫県)、北陸道近江・若狭国境と愛発関推定地周辺(福井県・滋賀県)、東山道不破関・不破駅周辺(岐阜県)などの現地調査を実施した。布勢駅・野磨駅は、明確な駅家遺構として注目されているもので、山陽道駅家という特殊性は考慮しなければならないが、駅家の立地や周辺の遺跡との関係を検討するための指標となる。北陸道では近江・若狭国境周辺に残る深坂・追坂の地名の所在が注目され、甲斐や信濃の峠路に多くみられるミサカ・オオサカ地名を考えるうえでの比較対象になり得る。不破駅周辺では、関・駅・国府・国分寺・一宮など官衙施設が近接して立地している状況が確認され、甲斐・信濃両国府付近の駅路・駅家を検討するための参考事例として把握することができた。

最終年度にはこれらの成果をもとに、甲斐・信濃両国の交通をとおした関係について考察をおこない、口頭報告・論文として成果

を公表した。その趣旨としては、両国はそれぞれ東海道・東山道と、七道制による所属を異にしているが、甲斐国は東山道に属するとの認識が古代をとおして存在していたこと、これに関連して、甲斐～都への往来にあたっては、本来通行すべき東海道ではなく、信濃へと進んで東山道を通行する経路も考えられていた。両国はともに馬足生産国と位置づけられ、またそれと深く関わる群盗の活動を確認できる地域として、盛んな人馬の往来と、それを可能にした交通路の存在を想定することができる。中世初頭の史料にみえる人々の移動の状況から、古代に成立していた両国間(とくに諏訪郡へ)の交通路が、中世まで受け継がれている可能性があることなどを指摘し、駅路では結ばれていないものの、他の交通路によって形成されていた両国の関係の一端を提示した。

またこの間、2013 年 7 月に山梨県富士河口湖町・鯉ノ水(こいのみず)遺跡において、古代の東海道支路(東海道甲斐路)の一部と推定される道路状遺構の発掘調査が行われ、甲斐国における古代交通研究のための重要な成果となった。本研究では遺跡の見学をさせていただき、状況確認等を行ったが、その成果を十分に活用することはできなかった。同遺跡の成果にもとづく甲斐国駅路の考察については、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

海老沼真治、古代・中世甲斐国交通関係文献史料(補遺)、『山梨県立博物館研究紀要』第8集、2014年、査読無、pp51-60
海老沼真治、文献史料にみる甲斐と信濃、『飯田市歴史研究所年報』12、2014年、査読無

[学会発表](計3件)

海老沼真治、中部内陸地域交通の一視点、科研費「日本古代・中世期における中部内陸地域の交通・交易体系に関する基礎的研究」研究会、2012年3月11日、山梨県立博物館(山梨県)
海老沼真治、文献史料にみる甲斐と信濃、古代甲斐国官衙研究会第100回研究例会、2013年7月24日、帝京大学文化財研究所(山梨県)
海老沼真治、文献史料にみる甲斐と信濃、第11回飯田市地域史研究集会「古代の交通と地方社会 イナ・シナノとその周辺」、2013年8月24日、飯田信用金庫本展大会議室(長野県)

[その他]

ホームページ等

<http://www.museum.pref.yamanashi.jp/2nd>

_news_kaken_ebinuma_01.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

海老沼 真治 (EBINUMA SHINJI)

山梨県立博物館・学芸課・学芸員

研究者番号：20574156

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし